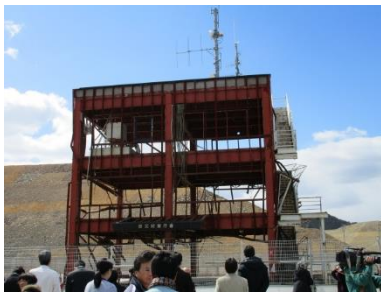


東日本大震災から10年

平成23年3月11日午後2時46分、震度7という巨大地震が東北地方を中心に12都道県を襲ってから10年が経過しました。22,000人の死者(震災関連死を含む)・行方不明者が発生しました。これは明治以降で関東大震災(死者・行方不明者推定10万5000人)に次ぐ2番目に大きな地震災害であったということです。現在でも、2500人以上の行方不明者が居るということです。10年の間に復興は進んだとは言え、まだ4万人以上の方々が避難生活をされているそうです。

つらい、悲しいと言葉では言い表せないでしょう。3月11日の前から新聞、テレビ等マスコミ



ではあの日の事、その後の事報道されています。館長もこれまで何回か、岩手、宮城を訪問しました。初めて行った5年前の被災地は今

の整備され、慰霊の場・津波伝承施設とは大きく違い、復興道半ばという状態でした。震災直後は、被災地を訪問するのは、物見遊山のように思われるのではないかと足が向きませんでした。

写真は南三陸町の「防災対策庁舎」では15、5mの津波で屋上に避難していた40数名が流された。陸前高田市の「奇跡の一本松」と言われるのは、7万本の松林の中で1本だけしか残らなかったからです。



マグニチュード9という日本では記録に残っている中で最大の地震が3分以上揺れ続けたそうです。釜石の中学生は、揺れている途中から避難を始めたので学校に居てた全員が助かった。

想像を絶する大地震、そして大津波が起ったのです。そのことは心に留めておきたいものです。

書籍「絆」出版されました

(一財)沿岸技術研究センター等が組織する国際津波・沿岸防災技術啓発事業組織委員会が書籍「絆・津波からいのちを守るために」を出版されました。これは、「濱口梧陵生誕200年」「濱口梧陵国際賞創設5周年」「東日本大震災10年」の節目ということで編集されたものです。50名が寄稿しています。館長も「濱口梧陵と稲むらの火～我が国の津波防災の起源、広村堤防～」として書かせていただきました。この本は、「稲むらの火の館」にありますので、興味のある方はお越しく下さい。



コラム<百世安堵>がスタートします

前号まで、関西大学社会安全学部近藤ゼミと龍谷大学政策学部石原ゼミの学生さん方が「関西・龍谷NEWS」を令和元年8月号から20回にわたって御寄稿いただきました。3年3月号で一応終了しました。その後を受けて、この学生さん方を指導されている関西大学社会安全学部近藤誠司准教授がコラムを御寄稿いただくことになりました。今回は第2面に第1回がありますので、皆さまご覧ください。

【なまず館長 ギギちゃん】登場!!

「稲むらの火の館」に「なまず館長 ギギ」が1月から登場しました。どうして、「なまず」がと思いますか。「なまず」は地震の前に暴れるという言い伝えがあります。江戸時代の本にも暴れている絵が載っているものもあります。「ギギちゃん」は地震を予知して暴れてくれるのでしょうか。ただ、夜行性ということで昼間は石の間に隠れていますので、なかなか顔を見せてくれません。



百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

夏の夜かたり

(第5回)

広村郷土市(明治42年)

渋谷家文書

第1回 梧陵さんの“生き様”にまなぶ

広川町に足を運び始めて約10年。今でも新鮮な驚きを感じるのは、多くの町民が郷土の偉人・濱口梧陵のことを、親しみを込めて「梧陵さん」と呼んでいることです。私はここに、未来社会を構想するうえで重要なカギがあると見ています。

「災害情報」や「防災教育」という、私が普段研究・調査し、各地で社会実践している分野では、とにかく成果を競い合い、短期間のうちにはかばかしい功績をあげなければ、まるで無駄なことを為しているかのように判じられてしまいます。しかし本当は、防災や復興の営みは、遠い将来世代を見据えておこなうべき息の長いものです。煎じ詰めれば、次なる災害が起きたときに、ようやく取り組みの真価が推し量れるというわけです。

濱口梧陵は、安政の南海地震のあと、村の復興に私財を擲ち、堤防を築かせました。目の前で困窮している民を思い、手を差し伸べたわけですが、その時さらに、まだ見ぬ子孫のことにも思いを馳せていました。この遠近両方の時間スケールを兼ね備えたまなざしで尽力する“生き様”が、多くの人たちのこころを魅了し、今もその功績を讃える動力源になっているのだと思うのです。

流行り言葉で言えば、これはひとつの「ロールモデル」です。わたしたちは、梧陵さんのように生き抜いてみたい。梧陵さんを範とすれば、この混沌とした時代にあって、防災・復興・教育・医学・福祉、さらには、まちづくりなどのアプローチを束ねて、いまいちど“百世の安堵”を夢想する勇気がわいてくるのではないのでしょうか。

「まなぶ」(学ぶ)とは、「まねぶ」(真似ぶ)こと。梧陵さんの人格を見つめ、その背中を追い求めるなかで、広川町・発の、独自のチャレンジを為していけるとよいのではないかと思います。ぜひ、この短いコラムを通して、稲むらの火のごとく、こころある道を照らしてまいりましょう。

然れども、尚古きに執着するは人情の常にして苦しき古に、尚執着して祭礼等や、盆をどり等を盛にやりしかば大に苦む原因なりと、翁がしりければ之れを滅する止める方法なり。

広橋の破れたるを、翁は少しも広村に課せず自費にて広橋をつられたり。中途にて海嘯にて流る。翁は人口の少なを不可とし、漁師を集めて大網を三張、一張千両程入費して作り、盛に資本に入れたりければ、湯浅、栖原等の漁師、広に来るもの多く人口も大分多くなりき。而るに不幸にも嘉永七年大海嘯此あわれなる。弧村に漸く盛なるを見ずして之れを破壊し去りき。此れ実に広村のみの大海嘯にして、湯浅に左程閑せざりき。此際の翁の大慈悲は実に大なるものにして、罹災人民を救済せられけり。

広八幡社内に人民大程あつまりき、実に非常なる混雑なりき。翁は茲に於て更に熟考せられ広村の租税を軽減する方法として、価格の高きものを◎堤防敷地となし其後海嘯堤防と云う名目のもとに、之れをつぶし且つ破壊家屋を捨てる場所を兼ねて、人民の仕事を多くせん為めに大事業を起さして、藩主と交渉して目的通り出来たり。松は其時植へしものなり。而れども人民は海嘯をおそれて他所に移転するも多かりき。余が家も父吉兵衛と共に湯浅に家を買って求めて、之れに移り住みしが、翁自ら来て渋谷吉兵衛よ、汝は我とは寺胞輩なりしが、此度の災難に付きて汝は湯浅に去りしが、広村は斯くなれば漸次衰亡するが如し。自分の如き移り住むが如き心なきに汝も余に同情せよと、ほとんど自個の事に関するが如くなげかければ、吉兵衛も大いに之れを感じて広に帰りし次第なりき。此頃に於ける翁が家財の散出は実に多大なるものにして、筆紙に尽し難し実に翁に対する広人民の恩は実に広大なるものなりき。

嘉永七年寅九月十日頃ペルリ来賀したり。

「たてがみまつり」旧九月十五日に広浦に来れり、来るも直ちに出港せり、「ペルリ」は帆船の四本柱の大船にて、沖通り水雷艇の如き小艇は津々浦々に入り来りしなり。(つづく)

